

村上春樹と蹴上・山科

——『猫を棄てる 父親について語るとき』によせて——

細川 涼 一

一 つながる村上春樹

—山科からつながる五冊

二〇二一年一月、たちばなりンクが京都橋大学生協で行った村上春樹（一九四九―）のブックフェアに際し、村上春樹の著書五冊を推薦するように依頼され、私は「つながる村上春樹―山科からつながる五冊」を寄稿した。この文章はブックフェアのなかで京都橋大学生協にパネルとして貼りだされた文章であり（原稿の分量が多少多かつたため、パネルでは一部省略）、活字として発表されたものではないから、まず次にその内容を示そう。

『羊をめぐる冒険』（講談社、一九八二年）

「僕」と友人の鼠の物語である初期三部作の三作目。主人公が異界

に迷い込み、死者（幽霊）と対話し、生ある世界に帰還するという、村上春樹長編の主要テーマ¹死からの自己救済がうかがえる作品。読後に、羊の牧場がある十二滝町のモデルとされる北海道美深町^{ひぶか}を、旭川出身の橋本奈々未が訪ねる、DVD『乃木坂46橋本奈々未の恋する文学―冬の旅―』（北海道文化放送、二〇一六年）を見るのも楽しい。

『ノルウェイの森』上・下（講談社、一九八七年）

春樹長編の入門書として薦める。一見抒情的な恋愛小説であるが、『クロノス』三二号に書いたように¹、外部に対する全てを自分の中に内閉して自殺し、「僕」を愛さなかった女性との、恋愛が成立しなかった恋愛小説である。直子が入った療養施設があったのは京都北山。『風の歌を聴け』（講談社、一九七九年）

春樹の長編は、同時代を総括しようとする年代記的な側面もある。

それは、父親が兵役にとられ、送り込まれた中国戦線の時代から（『ねじまき鳥クロニクル』）、一九九〇年代のオウム真理教事件にまで及んで

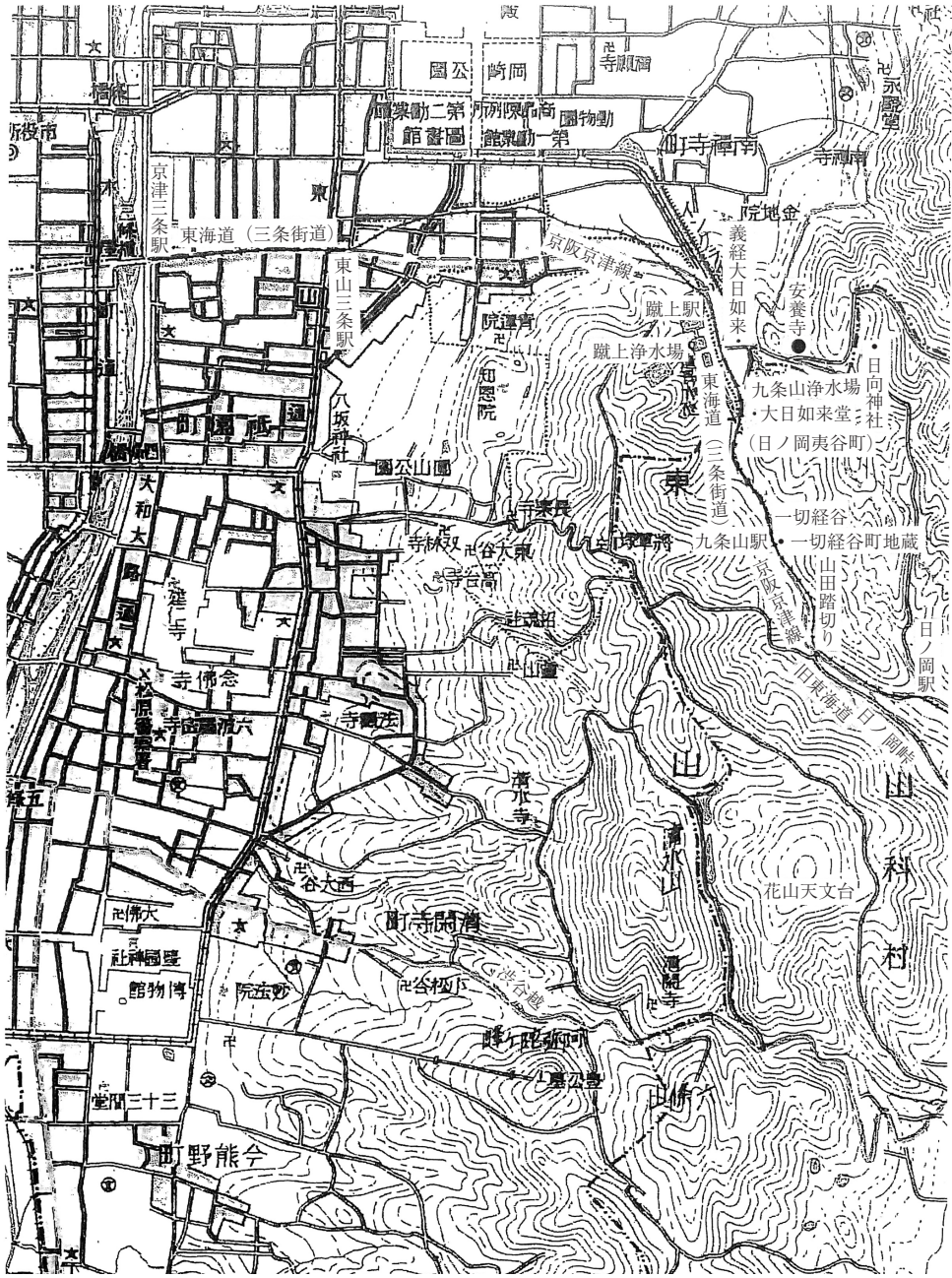


図1 蹴上安養寺・日ノ岡付近

いるが(『1Q84』)、その片鱗は学生運動が吹き荒れ、やがて終焉した一九七〇年を描いたデビュー作『風の歌を聴け』に、すでにうかがえる。デビュー作であると同時に、「僕」と鼠の物語である初期三部作の一作目。鼠の名前は、たぶんアメリカン・ニューシネマ『真夜中のカーボーイ』に登場する、都会の片隅でみじめに暮らし、死んでいくダスティン・ホフマンの役柄から採られた。⁽²⁾ 神戸港の倉庫街を描いた佐々木マキの表紙も印象的である。

『村上さんのところ』(新潮社、二〇一五年)

最後は山科のご当地ネタ本二冊。春樹が読者の質問に答える本であるが、京都で最も好きな場所という質問に答えて、山科の毘沙門堂をあげている。毘沙門堂とその参道に当たる山科疏水界限では映画のロケもしばしば行われ、最近のものとしては、京都を舞台にした『劇場版名探偵コナン から紅の恋歌』のエンドロールに登場する、紅葉に染まった毘沙門堂も美しい。

『猫を棄てる 父親について語るとき』(文藝春秋、二〇二〇年)

春樹の祖父が住職を務めた浄土宗西山派の安養寺は、蹴上の東側の山(大日山)の麓、日向大神宮(日向神社)に向かう坂道の途中にある。春樹の父はその寺の次男として生まれた。蹴上界限は山科区・左京区・東山区の境であり(たとえばウエスティン都ホテルは東山区)、日向大神宮は山科区日ノ岡であるが、安養寺は残念ながらぎりぎり左京区粟田口の南端である。

五冊すべての本が京都や山科と関係するわけではないが、京都橘大

学が京都市山科区に立地するのに合わせて、京都・山科とかわりがある本を何冊か交えたところに特徴があるといえたいえよう。

ところで、この文章を書くのを契機として、というよりは『猫を棄てる 父親について語るとき』が発表されたのを契機として(初出は

『文藝春秋』二〇一九年六月号)、私は春樹の祖父村上弁識が住職を務めた浄土宗西山派の青龍山安養寺(現京都市左京区粟田口山下町の飛地)について、若干のことを調べた。そこで本稿では、山科の「郷土」史とでもいうべき前稿の補遺として、村上春樹と蹴上・山科の関係を安養寺を中心に述べてみることにしたい。したがって本稿は、春樹文学をめぐる文芸評論というよりは、山科地域をめぐる「郷土」史の一斑として書いたものである。

二 毘沙門堂界限

— 『村上さんのところ』

村上春樹の戸籍上の生まれは京都である。しかし、生後すぐに兵庫県西宮市夙川、ついで芦屋市に引っ越し、神戸山の手の高校に通った。こうして春樹は、自らを典型的な「阪神間少年」と称し、芦屋・神戸を記憶の集積としての「故郷」と呼ぶ。⁽⁵⁾ その一方、戸籍上の出生地である京都を舞台とする作品は、『ノルウェイの森』(ただし、その大部分は東京が舞台)を例外としてほとんどない。

これは高校時代に、神戸のダウンタウンで「コンサート」に出かけたり、古本屋で安いパーパーバックを漁ったり、ジャズ喫茶に入り浸っ

たり、アートシアターでヌーヴェルヴァーグの映画を見る」といったアメリカ文化を吸収して文学者としての資質を形成した春樹にとつて、日本の伝統文化(古典文化)の面における歴史的・現実的役割を今日に伝えるところとされた京都は、自らの作品に取り入れるには相応しくない場所とされたからであろう。春樹の長編小説に登場する、自分自身の内部規範を行動原理とする主人公像は、レイモンド・チャンドラーやロス・マクドナルドをはじめとするアメリカのハードボイルド小説を読むなかで獲得されたといつてよいのである。

しかし、とくに最近のエッセイでは春樹は京都に言及し、中には京都東郊の山科に触れたものもある。春樹が読者からのメールによる質問に答える形で書かれた『村上さんのところ』では、京都で最も好きな場所はどこでしょうという香港からの留学生の質問に答えて、次のように述べている。⁽⁸⁾

京都には僕の好きな場所がいくつもあります。毘沙門堂もわり人喜欢いです。山科の駅からのんびり坂道を登っていく。この道が僕はけっこう気に入っています。近くにおいしい蕎麦やさんもあります。帰り道は疏水沿いにぶらぶらと散歩します。桜と紅葉のシーズンは混んでいるけど、あとは比較的静かなところですよ。いつも一人で、あてもなく考え事をしながら歩いています。

旧東海道から毘沙門堂に行くには、毘沙門堂参道(江戸時代、毘沙門堂道と呼ばれた)をまっすぐ北に向かい、途中で山科疏水(琵琶湖疏水を渡るが、参道西側の安朱馬場ノ西町には、一九九〇年代、ひのき、安兵衛という二つの料理屋があった⁽¹⁰⁾)。このうちひのきは二〇〇〇年代に

閉店してマンションに建て替えられたが、蕎麦屋の安兵衛は二〇〇〇年代に入っても営業していたので、春樹が記す「お蕎麦やさん」は安兵衛のこととしてよいであろう。現在は安兵衛も閉店し、居住者も替わって民家になっている。山科の料理屋としては、江戸時代から続いた奴茶屋(安朱棧敷町。旧東海道に面し、旅館も兼ねた)が著名であったが、奴茶屋もすでに建物を取り壊して閉店し、山科の一部の変化は二〇〇〇年代に入ってから著しいものがある。かつて一九七〇年代に、山科の光景を京都の旅行案内書は、「大津から逢坂山(東海道線―引用者)や音羽山(東海道新幹線―引用者)トンネルをぬけて、つぎの東山トンネルに入るまでの間、東海道線や新幹線の車窓からびっしりいらかの波のつづく盆地の風景がながめられる」と述べた。⁽¹²⁾一九七〇年代にすでに山科は、「京都の近郊農村から住宅地・市街地へと変貌を遂げていたことがうかがえるが、それでもこの当時、日本家屋の「いらかの波」の家並みが続いた山科の光景は、今日では多く小さなビルやマンションが建ち並ぶ景観に替わったのである。

山科疏水については、門脇禎二が子供のころの思い出として、「わたくしも子供の頃に、父につれられて大津三井寺の下からくだったことがある。トンネルの中は暗く、時々水滴も落ちて不気味であったが、トンネルを抜けた沿堤の桜並木が、疏水の上に門をなして美しくかつ」と述べている。⁽¹³⁾門脇が記憶する、疏水がトンネルを抜けた途端に広がる沿堤の桜並木は、毘沙門堂界隈の光景としてよいであろう。



図2 『拾遺都名所図会』巻二より蹴上安養寺。門前の東海道の家並みが蹴上九体町・蹴上六軒町。

三 蹴上安養寺と春樹の祖父村上弁識

村上春樹の父は、蹴上にある浄土宗西山派の青龍山安養寺の住職の次男として、一九一七年(大正六)に生まれた。春樹は最近まで父祖について積極的に語ることはなかったし、作家にとっては作品がすべてであるという立場に立てば、作品を味読するうえで作家の履歴はどうでもよいということになる。しかし、春樹自らが『猫を棄てる』父親について語るとき『では父母と祖父について語っているので、ここでは「郷土」史の立場から、春樹の祖父・村上弁識(一八八七?—一九五八)が住職を務めた蹴上安養寺について述べることにしたい。

蹴上安養寺については、江戸時代の地誌では『拾遺都名所図会』巻二が「蹴上安養寺、神明(日向神社。江戸時代には粟田口神明宮と呼ばれた—引用者)鳥居前」の絵を掲げるが、絵のみで文章による記事はない。¹⁵⁾ 江戸幕府が作成した『東海道分間延絵図』(大津宿—京)¹⁶⁾にも、東海道の「日岡村之内九体町」「六軒町」に沿って、「粟田神明・門出蛭子」(粟田口神明宮)とともに「安養寺」が描かれる。

また、村田路人がトレースして引用する「比留田家文書」の文化四年(一八〇七)新規休所設置願付図(日ノ岡村付近の東海道の図)には、東海道の「日ノ岡村の内蹴上九体町・同六軒町」¹⁸⁾から粟田口神明宮に向かう参道(神明道)が描かれている。そこには、「神明社地」(粟田口神明宮)と並んで「安養寺地」が見出せる。恐らく安養寺は江戸時代、粟田口神明宮に参詣する旅人も立ち寄って賑わったことであろう。

近代に入って、『京都坊目誌』(一九一五—二六年(大正四—五)刊)の上京第二十七学区粟田口町之部に安養寺の記事を掲げ、「字大日山一番戸にあり(三条通小間座町(現東山区東小物座町。京都市営地下鉄東西線蹴上駅が地下にある—引用者)より疏水神明橋を渡りて上にあり)。青龍山と号す。浄土宗西山派粟生光明寺に属す。門(南面)本堂(東面)本尊阿弥陀仏ノ像を安す(座像四尺)。恵心(源信—引用者)の作なりと。傍に慈覚ノ像を置く」として、大略次のような寺伝を伝えている。¹⁹⁾

安養寺ははじめ慈覚(円仁—引用者)が一切経を納めて一切経谷に草創した天台宗の寺院である。旧地の一切経谷は、現在地神明山(大日山)の東南に当たる(現山科区日ノ岡(旧日ノ岡村)一切経谷町。三条街道(京都府道143号線)の京阪バス九条山バス停(旧京阪電車京津線九条山

『平家物語』に、天台座主明雲もしばらくこの谷にいたことが見える。応仁元年(一四六七)八月の東岩倉合戦に際し、大内氏が一切経谷に陣し、ために寺院は兵火で焼亡した。延徳年中(一四八九―九二)、比丘尼智照が現在地に移転し、草庵を結び居住した。天正年間(一五七三―九二)、僧道観(永養と号す)がここに住し、浄土宗に改宗して寛永十九年(一六四二)に寂した。二世僧一忠が堂宇を建立し、清浄華院(現上京区北之辺町)に請うて寺号を安養寺と名づけた。一忠は専修念仏を称えるほかは終生無言であつたという奇行で知られ、俗世間を逃れて最後は行方知らずになつたとも、承応二年(一六五三)正月に寂したとも伝える。六世僧専西が一万日念仏の廻向をし、天和二年(一六八二)良恩寺(現東山区栗田口鍛冶町。もと栗田口村惣掌(引用者)に附属した。享保八年(一七二三)青蓮院門主に専属し(すなわち、天台宗に戻つた)ということか(引用者)、維新後粟生光明寺に転属した(すなわち現在に至る浄土宗西山派に転属(引用者))。

以上が寺伝に伝える安養寺の寺史である。『平家物語』巻第二「座主流」に、安元三年(一一七七)五月、後白河院近臣の西光の讒訴によつて天台座主明雲が解任され、伊豆国に流罪と決まり、二十一日に「僧正なくく(白河の)引用者御坊を出て、栗田口のとおり、一切経の別所にいらせ給ふ」とあるように、現山科区日ノ岡一切経谷町に当たる一切経谷には比叡山の別所一切経堂があり、明雲がここに住したことも事実である(いづゆる鹿ヶ谷の陰謀事件(安元三年の政変)によつて西光は平清盛に斬られ、明雲の流罪は実行されなかつた)。この一切経堂は応仁元年(一四六七)の東岩倉合戦で南禅寺など栗田口付近の多くの

寺院・史跡とともに焼亡したといわれる(「応仁記」⁽²¹⁾など)。

安養寺は、かつて一切経谷にあり、応仁の乱で廃寺となつた比叡山別所の一切経堂を安養寺の前身とし、これに比丘尼智照・僧道観以後、寺史がはつきりしている大日山麓の栗田口村安養寺を結びつけることで、安養寺の歴史を近世以前まで遡らせて寺伝として綴つた、とすることができようであろう。ただし、近代に浄土宗西山派(粟生光明寺末)となる以前、江戸時代にも安養寺は浄土宗だけでなく青蓮院門跡ともかわりを有しており、安養寺に天台の山門(比叡山延暦寺)派の影響があつたことは事実と思われる。山号の「青龍」山は、安養寺が四神の東方青龍として京都の東の出入口である栗田口に位置することからの命名であろう。

春樹の祖父村上弁識は、春樹によれば愛知県の農家の息子だったが、修行を積んだ末に京都の安養寺に住職として迎えられた。春樹は祖父弁識について、「どうやらかなり自由闊達なタイプの人物であり、豪快に酒を飲み、また酔つ払うことで名を馳せていたようだ。名前の通り弁も立ち、僧侶としてはそれなりに有能な人であり、人望もあつたらしい。僕の覚えている限りでは、一見して豪放磊落、一種カリスマ的な要素を持ち合わせていた」として、その最後について次のように述べている。

彼は六人の息子をもうけ(女子は一人もいなかった)、元氣よく人生を生きってきたが、1958年8月25日の朝、8時50分頃に京都(御陵)と大津を結ぶ京津線の山田踏切りを横断しようとして、電車にはねられて死んだ。東山区山科北花山山田町(当時の住所)に

ある警手のいない踏切りだった。ちょうど大きな台風が近畿地方を襲った日で(その日、東海道線も一部不通になった)、激しい雨が降っていて、祖父は傘を差しており、カーブを曲がってやってくる電車の姿が見えなかったのだろう。耳も少し悪かったようだ。僕はなぜか祖父が死んだのは台風の中で、檀家を訪れた帰り道でたぶん少し酒も入っていたというように記憶していたのだが、当時の新聞記事調べてみると、話はまったく違っている。

村上弁識の事故死について、当時の『京都新聞』一九五八年(昭和三十三年)八月二十五日付夕刊は、「二十五日朝八時五十分ごろ、京都市東山区山科北花山山田町(山科区は当時は東山区の一部引用者)、京津線山田踏切りを横断しようとした左京区粟田口山下町、安養寺住職村上弁識さん(七〇)は、三条発石山行急行電車Ⅱ田辺常夫運転士(三三)Ⅱにはねられ即死した。無警手の踏切りで、雨のためカサをさして電車に気づかなかつたもの」と報じている。また、同八月二十七日付朝刊市民版の「亡くなった人」の左京の欄に、「25日Ⅱ粟田口字山下八村上弁識(七二)」とある(年齢の違いは原文のまま)⁽²²⁾。

村上弁識が亡くなった山科区北花山山田町の旧京阪電車京津線山田踏切り(九条山駅と日ノ岡駅(ともに廃駅)の間)は、江戸時代の旧東海道が現京都府道143号線(三条街道。旧国道1号)に合流する所にあつた⁽²³⁾。すなわち、山科・御陵から蹴上・三条大橋方面に向かうならば、旧東海道が遠近道印の『東海道分間絵図』⁽²⁴⁾に、「此所上り坂」「此所うばがふところ(姥が懐)と云」とある日ノ岡峠の難所(現山科区日ノ岡ホッパラ町から北花山山田町にかけての上り)を越え、現京都府道143号線に

合流する際に渡る、京津線の踏切りが山田踏切りなのである。

なお、府道143号線(旧国道1号)のうち、御陵の天智天皇陵(山田踏切り間は、東海道の日ノ岡峠の難所を東側に迂回するために、幕末の慶応年間(一八六五―一八六八)にでき、一八七五年(明治八)から三年がかりで大規模な改良工事を行った新道である⁽²⁶⁾)から三年がかりで迂回したため、日ノ岡峠付近で古い東海道の景観が残ったといえよう。

旧山田踏切りから東海道は、京都府道143号線を『東海道分間絵図』に「石のじぞう(地藏)⁽²⁷⁾」「山の本にかけ(蹴上カ)の水」とある京阪バス九条山バス停(旧京津線九条山駅)のピークを過ぎ(九条山バス停の東側が山科区日ノ岡一切経谷町。寺伝に安養寺の旧地と伝える所)、「神明への道」Ⅱ粟田口神明宮(日向神社)と安養寺の参道に至るのである。すなわち東海道は、春樹の祖父弁識が蹴上の安養寺から檀家廻りなどで九条山や日ノ岡の峠を越えて往還し、最後に命を落とした所でもあつた。

春樹の長編第二作『1973年のピンボール』には、「土砂降りの雨と冷や酒と難聴のせい」で電車に轢かれて死んだ井戸掘り職人の挿話があるが、この井戸掘り職人の挿話は、祖父のことを意識して描かれたことがうかがえる。以後、井戸が繰り返す春樹作品に登場することは、春樹の読者にはすでに周知の事実である⁽²⁹⁾。

三条街道(京都府道143号線)から日向神社に向かう参道(神明道)入口には、日向神社の鳥居と安養寺の石柱が立つが、この安養寺石柱は春樹の祖父弁識が一九三二年(昭和六)十二月に立てたものである。石



図3 旧京津線山田踏切り付近から旧東海道日ノ岡峠方面を臨む



図4 安養寺石柱表面

柱表面に「青龍山安養寺」、裏面に「昭和六年十二月建之 住職村上弁識」とある(筆者採訪)。この石柱は三条街道を行き交う人々にとつて、ランドマークとしても目立つ立派なものであるが、これだけの石造物を勧進造立した弁識は、確かに春樹が述べるように「僧侶としてはそれなりに有能な人であり、人望もあつた」といえるのである。安



図5 安養寺石柱裏面村上弁識の銘文

養寺の僧侶としては、終生無言であつたという二世一忠と、名の通り弁が立つたという村上弁識は、対照的な意味で傑出した僧侶であつた(ただし豪放磊落さで鳴らし、謹厳実直な僧侶の規範を外れた面では、二人は相似形をも示している)とすることができよう。

結びにかえて

京都東郊の山科は、洛中との対比で、洛中Ⅱ中心に対する周縁として語られることが多い。中京なかきょうで老舗を営む家の令嬢が、山科の男から縁談があつたのに対し、地理的な条件が落ちたとして、「山科なんかいったら、東山が西の方に見えてしまうやないの」と説明したという、井上章一『京都ぎらい』の話は、『京都ぎらい』が読まれる中で有名なエピソードとなつたが、中世史研究者の横井清の「京都幻像―ある小宇宙」(二九八一年初出)に、同様の話はその先蹤を見出せる。³¹⁾横井

は一九六九年、三十有余年を過ごした下京区の「お町内」を離れて山科の東端部(山科区小山中ノ川町。当時は東山区山科小山中ノ川町。音羽山(牛尾山)への登山口(牛尾山道)が近くにあって、横井自身は「牛尾山麓」と呼んだ)に移住した時、夕陽が東山連峰に落ちて行くのを見て、衝撃を受けたと「京都幻像―ある小宇宙」で述懐している。

もつとも横井は、『京都ざらい』の「中京の老舗の令嬢」とは違い、東山が西に見えるのを山科に対する貶めとして述べているのではなく、そこから「京都」史に対する視座の転換が自分の中で始まった、と語るのである。周縁⇨山科の視座からする中心⇨「京都」(洛中)の「町」の対象化・相対化とすることができであろう。中世京都の暗部を民衆の視座からえぐった畢生の著書『中世民衆の生活文化』⁽³³⁾は、こうして東山に西日が沈むのを山科から眺める横井の思索とともに生まれた。

翻って、春樹が京都で最も好きな場所として、洛中を中心とする京都盆地の寺院や史跡ではなく、東山を一つ隔てた山科の毘沙門堂と山科疏水をあげた時、洛中の「京都人」が山科に対して持つ揶揄的な視線があることを意識したかどうかはわからない。しかし春樹が、京都で最も好きな場所として、山科の寺院と疏水を掲げたのは、恐らくは春樹が洛中の「京都人」の説明する「京都」の範囲を知らないからなのではなく、山科への入口ともいえる蹴上の、しかも疏水(蹴上インクライン)の傍らにある寺院の住職を祖父に持った者として、この地域に対する自然な親近感から出たことなのであるとすることができよう。

注

- (1) 拙稿「村上春樹『ノルウェイの森』(『クロノス』三二号、京都橋大学女性歴史文化研究所、二〇一〇年)。
- (2) 大学時代を早稲田大学文学部映画演劇科の学生として過ごした村上春樹には、映画(洋画)をめぐる著書もある(村上春樹・川本三郎『映画をめぐる冒険』講談社、一九八五年)。「映画をめぐる冒険」では、『真夜中のカーボーイ』も取りあげられているが、執筆担当は共著者の川本三郎である。
- (3) 松本清張は都ホテル(当時。現ウエスティン都ホテル)を愛し、京阪電車京津線が併用軌道(路面)電車として京津三条⇨蹴上界隈を走っていたころの都ホテルを、たびたび作品に登場させている(松本清張『球形の荒野』光文社カッパ・ノベルス、一九七一年、一七五頁以降、同『小説帝銀事件』角川文庫、一九六一年、三頁以降、など)。
- (4) 拙稿「記録に見る山科の街道と旅―伏見街道・三条街道(東海道)・毘沙門堂―」(『京都橋大学女性歴史文化研究所紀要』二九号、二〇二一年)。
- (5) (6) 村上春樹『辺境・近境』新潮社、一九九八年、「神戸まで歩く」。
- (7) なお、高取英・村上春樹インタビュー「幻想のアメリカ少年は中産階級の友が好きだった」(『宝島』一九八一年十一月号、JICC出版局)参照。
- (7) 横井清「京都幻像―ある小宇宙」(『都忘れの京語り』編集工房ノア、二〇二一年)、一三頁。『都忘れの京語り』は横井の三周忌を期し、妻の横井泰子氏によって、横井の『故郷京都論』を意図して編まれた遺著。
- (8) 村上春樹『村上さんのところ』新潮社、二〇一五年、一四頁。原文「疎水」を「疏水」に訂正。
- (9) 後藤敦史「近代の山科」(京都橋大学・山科区役所協力『山科の歴史と現代』山科経済同友会、二〇二〇年)。一八九〇年明治二十三)に竣工した琵琶湖疏水の歴史を簡潔に纏めている。
- (10) タイムスベース『京都』昭文社Uガイド、一九九三年十二版、四〇一頁。
- (11) 『ゼンリン住宅地図 京都市10山科区』ゼンリン京都営業所、二〇〇

四年五月。

- (12) 有馬茂純『京都』実業之日本社ブルー・ガイドブックス、一九七二年、二二二頁。

- (13) 門脇慎二『京都・奈良の旅』社会思想社現代教養文庫、一九六三年、五一頁。

- (14) 村上春樹『猫を棄てる 父親について語るとき』文藝春秋、二〇二〇年。『文藝春秋』二〇一九年六月号の初出(猫を棄てる―父親について語るときに僕の語ること)とはほぼ同じ内容であるが、初出では祖父村上弁識については名前が記されているのに対し、父の名前ははっきりと示されてはいなかった。京都の寺院の住職であった祖父がある程度公人としてとらえられたのに対し、阪神間の中高一貫私立高で国語教師をしていた父は私人と考えられたための措置であろうが、単行本化に際して父の名前が村上千秋であることが追記された。

- (15) 『新修京都叢書』第七巻 拾遺都名所図会、臨川書店、一九六七年、二四二頁。

- (16) 『東海道分間延絵図』第二十二巻 大津京、東京美術、一九八五年。

- (17) 村田路人『近世の山科』(後藤靖・田端泰子編『洛東探訪 山科の歴史と文化』淡交社、一九九二年)、「街道と山科郷」。

- (18) 蹴上九体町・蹴上六軒町は日ノ岡村に属したが、東小物座町から連続する東海道沿いの町場であった(京都市編『史料京都の歴史11山科区』平凡社、一九八八年、「日ノ岡村」の解説。鎌田道隆史料校訂分)。蹴上六軒町は東海道筋の粟田口神明宮門前(神明道入口)に、六軒の茶屋が設置されたことにもとづく町名である。蹴上九体町の町名は、後掲の注(27)で説明する源義経伝説に由来する。

- (19) 『新修京都叢書』第十九巻 京都坊目誌三、臨川書店、一九六八年、五三五頁。近代に纏められた京都の地誌では、竹村俊則『昭和京都名所図会2洛東下』駸々堂出版、一九八一年、四一―四二頁、日本歴史地名大系『京都市の地名』平凡社、一九七九年、一五八頁、が「安養寺」の項を立てるが、いずれも事実上『京都坊目誌』の要約である。

- (20) 新日本古典文学大系(梶原正昭・山下宏明校注)『平家物語』上、岩波

書店、一九九一年。『百鍊抄』治承元年五月二十一日条にも「前座主明雲配^三流伊豆国、公卿定文、依^レ不^レ叶^三時議^二不^レ被^レ下^レ之、今夜出^三本房^二、經^三廻^二一切経谷^二云々^一」とある(新訂増補国史大系普及版『百鍊抄』吉川弘文館、一九七九年)。

- (21) 京都市編『史料京都の歴史11山科区』(前掲)、二二八頁。

- (22) 『京都新聞』の閲覧は京都府立図書館架蔵マイクロフィルムによる。

- (23) 一九九七年の京都市営地下鉄東西線の開業にともない、一部で府道143号線(旧国道1号)との併用軌道(路面電車)で地上を走っていた京阪電車(京阪電気鉄道)京津線は、京津三条ノ御陵間が廃止された(それともない、村上弁識が轍かれた山田踏切りも廃止された)。かつての京阪京津線は、京津三条から東山三条・蹴上(以上併用軌道)・九条山(専用軌道)・日ノ岡(併用軌道)・御陵(専用軌道)の各駅を経て、京阪山科に至った。現在の地下鉄東西線御陵駅は、廃止された京津線日ノ岡駅と御陵駅のはほぼ中間地点(の府道143号線地下)に設置されている。京阪山科から先の京津線は、山科区内の四宮(車両基地四宮車庫がある)を経て追分で滋賀県大津市との境界を越える(現存部分)。京阪電車京津線のメモリアルとしては、奥田行男・野村董・諸河久『日本の私鉄7京阪』保育社カラーブックス、一九八一年、参照。九条山の山中を走る260型(一九五七年〜六三年製。恐らく村上弁識が奇禍にあったのは260型)準急の写真が同書六八頁にある。

- (24) 叢書江戸文庫『東海道名所記/東海道分間絵図』国書刊行会、二〇〇二年(佐伯孝弘校訂)。

- (25) 旧東海道の日ノ岡峠付近(栄花山荘という古民家付近。北花山山田町)は、二〇一六年、山科区の区制四〇周年記念として発行された日本郵便の記念切手にも、毘沙門堂・勸修寺・随心院・天智天皇陵と並び、山科の代表的な名所旧跡として採用されている。

- (26) 風人社編『ホントに歩く東海道第15集 南草津ノ三条大橋・伏見風人社、二〇一六年、『MAP No.39 山科(追分)ノ三条大橋』。風人社編『ホントに歩く中山道第1集 京都(三条大橋)ノ守山』風人社、二〇一八年、『MAP No.1 三条大橋ノ髭茶屋追分』。

(27)

現在も九条山バス停(旧京津線九条山駅)の東側に日ノ岡一切経谷町地藏堂がある(蹴上地藏とも呼ばれる)。源義経が平家の侍・関原与市に水を蹴り上げられ、腹を立てて与市とその郎等九人を斬り殺した。その菩提を弔うため、九体の石地藏を祀ったうちの、現存する三体の一つと伝える(『雍州府志』巻第九「九体町」の項)、『新修京都叢書』第十巻 雍州府志、臨川書店、一九六八年、六九七頁)、『都名所図会』巻之三「蹴上水」の項(竹村俊則校注『都名所図会』上巻、角川文庫、一九六八年、二九六頁)、『山城名勝志』巻第十三「蹴上水」の項(『改定史籍集覧』第二十二冊、近藤出版部、一九三三年三版、六八〇頁)が伝える蹴上水と蹴上九体町の地名の由来伝説。『山城名勝志』は『異本義経記』を出典とし、安元三年(一一七七)のこととして義経による関原与市重治の斬殺伝説を伝えるが、『義経記』でもこの話を伝えるのは、『山城名勝志』が引用する『異本義経記』のみである。『東海道分間絵図』にいう「石のじぞう」もこの石地藏としてよいであろう。なお、九体のうち、現存するほかの二体とされるのは、京都府道143号線をさらに京都市営地下鉄東西線蹴上駅(日向神社・安養寺参道)方面に戻った東山ドライブウェイ入口手前の大日如来堂(日ノ岡夷谷町)にある大日如来石像の左横に立つ石造地藏立像、蹴上インクライン(船溜り)近くの蹴上インクライン疏水公園(左京区粟田口山下町)東山区東小物座町。安養寺からもほど遠くない)にある義経大日如来である。既存の書物では、日ノ岡一切経谷町地藏(蹴上地藏)の写真は、京都新聞出版センター編『義経ハンドブック』京都新聞出版センター、二〇〇五年、一一七頁に、大日如来堂(日ノ岡夷谷町)の地藏立像の写真は、川口正貴『源義経と源平の京都』ユニプラン、二〇〇四年、三一頁に、蹴上インクライン疏水公園の義経大日如来の写真は、『源義経と源平の京都』三三頁、『義経ハンドブック』一一八頁にある(両書とも、所在地の住所の記載に若干の誤りがある)。ただし、竹村俊則はこれらの石地藏の年代を「鎌倉」「鎌倉風」とする一方で、「石仏九体とは粟田口刑場(江戸時代―引用者)にて処刑された人々の菩提を弔うために安置されたものであり、牛若丸とは無関係とみるのが正しい」と述べる(竹村俊則『昭和京都名所図会2 洛東下』

前掲、三七頁)。

(28) 村上春樹『1973年のピンボール』講談社文庫、一九八三年、一八頁。

(29) 春樹が早い時期に自ら井戸について語ったものとしては、村上春樹インタビュー(インタヴュー古田留美子)「ムラカミ・ワールドの秘密」(『宝島』一九八三年十一月号)がある。

(30) 井上章一『京都ざらい』朝日新書、二〇一五年、二八―三〇頁。井上は京都(洛中)の閉鎖性を強調しているが、水上勉はむしろ京都が地方の人を呑んで息づいてきた街であることを指摘している(水上勉『私版京都図絵』小学館P+Dブックス、二〇二〇年)。

(31) 横井清『京都幻像―ある小宇宙』(『都忘れの京語り』前掲)。私自身は「京都幻像―ある小宇宙」を、横井清『光あるうちに―中世文化と部落問題を追って―』阿吽社、一九九〇年、に収録された際にはじめて読んだ(『都忘れの京語り』には再録)。横井の遺著『都忘れの京語り』には、「京都幻像―ある小宇宙」とともに、市街地・住宅地に変貌しつつもなお農村の風景が残る一九七〇年代の山科を描いたエッセイ「牛尾山麓記抄より―山科雑感」も収録されている。

(32) 横井も溪流に釣りに出かけた牛尾山道(音羽山登山道)は、大人の遠足BOOK西日本8『京都をあるく』JTBパブリッシング、二〇一八年、一三四―一三七頁。なお、京都の散歩本は少なくないが、山科は取りあげられていないが、笹野みちる『泥沼ウォーカー』PARCO出版、一九九八年、は京都散歩本の隠れた名著だと思う。

(33) 横井清『中世民衆の生活文化』東京大学出版会、一九七五年。

(図1)は一九一五年(大正四)五月京都府発行の「京都府全図」の付録「京都市全図」を利用し、これに加筆した。